平安時代の窯跡

見てみよう、訪ねてみよう、せとの歴史と文化財

せと歴（れき）!

おごりんさん（塔山城）

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見　せと　歴史と文化財を知る見学会

「広久手窯跡群の発掘調査を見に行こう」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和２年８月30日（日）

見学コース：（予定時間）	①午前９時００分	②午後１時００分	文化センター北駐車場出発
	９時15分	１時15分	海上の森到着
	９時30分	１時30分	塔山城到着
	10時00分	２時00分	広久手C3窯跡到着
	10時35分	２時35分	広久手C3窯跡出発
	10時45分	２時45分	バスにて現地出発
	11時00分	３時00分	文化センター北駐車場到着・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳（西本地町2丁目）

宮地古墳群（上之山町2丁目）

広久手30号窯跡
木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県
木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県

古瀬戸瓶子（寺本町）

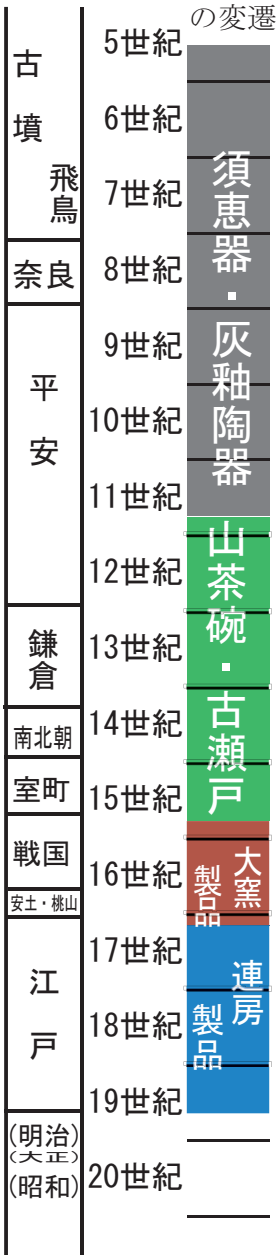
陶製狛犬（深川町）国

瀬戸窯跡【小長曽窯跡】（東白坂町）国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝（塩草町）

定光寺本堂（定光寺町）国
織田信長制札（窯町）
菱野郷倉『大般若経』［一部鎌倉］
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（凧山町）国
源敬公廟（定光寺町）国
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町）
石造地蔵菩薩立像（片草町）

陶質十六羅漢塑像（寺本町）
六角陶碑（藤四郎町）
旧山繁商店（仲切町・深川町）国登
瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登
陶製梵鐘（深川町）

やきもの生産の変遷



今回見学する文化財とその関連年表

（広久手第30号窯跡操業）
広久手C3窯跡操業

塔山城跡？

瀬戸市南部（幡山区）の窯業生産

瀬戸市南部の窯跡分布図（1：20,000）

現在、瀬戸市域で確認されている中世の窯跡はおよそ 500 基以上あり、そのうち南部の幡山区の窯跡は約 150 基にのぼります。さらに、幡山区には、12 世紀から登場する無釉の日常雑器である「山茶碗」を生産した窯や、中世の日本で唯一、釉薬を施したやきものである「古瀬戸」を生産した窯の中でも、その初期に操業した窯が集中しており、中世瀬戸窯の黎明期に盛んに窯業生産が行われたことが明らかにされています。中世における古瀬戸の生産は、後世、瀬戸市が「やきもののまち」として発展する礎となっており、そうした意味でも幡山区における窯業生産の重要性は注目すべきものです。

この中世瀬戸窯の誕生は、古代末期の幡山区における「灰釉陶器」生産に端を発しており、言い換えれば、瀬戸窯の誕生・発展のきっかけが幡山区の灰釉陶器生産であったといえます。幡山区の灰釉陶器窯には、広久手第 20・30 号窯跡、広久手 C1・C3 窯跡、広久手 E 窯跡、広久手 F 窯跡、百代寺窯跡などが挙げられます。これらは 10 世紀後半から 11 世紀代にかけて操業していることから、瀬戸窯発生期に位置付けられる窯跡といえ、東海地方における灰釉陶器生産全体の中でも同時代を代表する窯跡として有名です。ただ、これらはそのほとんどが昭和 30 年代に一度調査されていますが、当時の記録は昭和 49 年の歴史民俗資料館の火災により失われ、残念ながら窯の正確な図面が残されていないのが現状です。

そこで、平成 30 年 2 月と 8 月には、愛知学院大学によって、広久手 F 窯跡の窯体と焼成に失敗した製品を捨てた場所（灰原）を中心に再度発掘調査が行われ、詳細な情報が得られました。

そして今回、広久手 C3 窯跡についても同様の調査が行われることになりました。本窯跡は、広久手 F 窯跡よりも古く、瀬戸市に残されている窯跡の中でも最古級に位置付けられていることから極めて重要な窯跡であり、今回の発掘調査により瀬戸窯成立期の様相が改めて明らかにされることが期待されます。

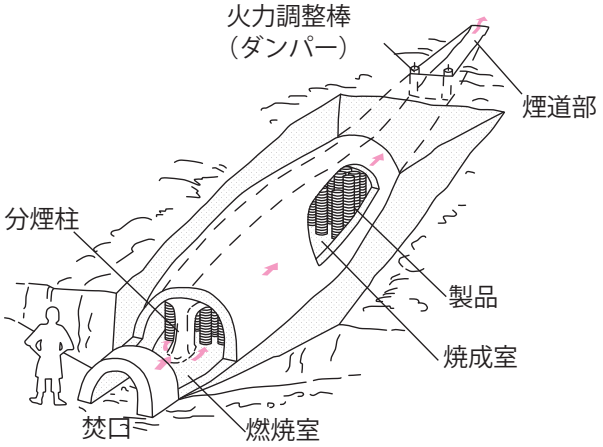
瀬戸市南部の窯跡一覧表

No.	遺跡名	時代	遺物の種類	No.	遺跡名	時代	遺物の種類
1	南山10号窯跡	13世紀	山茶碗	70	大草12・13号窯跡	12～13世紀	山茶碗
2	南山44号窯跡	12世紀	山茶碗・施釉陶器	71	大草14号窯跡	13世紀	山茶碗
3	南山36号窯跡	13世紀	山茶碗	72	大草11号窯跡	13世紀	山茶碗
4	南山31号窯跡	13世紀	山茶碗	73	大草4号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器
5	南山24号窯跡	12世紀	山茶碗	74	大草5号窯跡	13世紀	山茶碗
6	南山23号窯跡	13世紀	山茶碗	75	大草15号窯跡	13世紀	山茶碗
7	南山22号窯跡	13世紀	山茶碗	76	大草6号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
8	南山20号窯跡	13世紀	山茶碗	77	大草17号窯跡	13世紀	山茶碗
9	南山21号窯跡	13世紀	山茶碗	78	大草3号窯跡	13世紀	山茶碗
10	南山12号窯跡	11世紀	灰釉陶器	79	大草2号窯跡	12世紀	山茶碗
11	南山38号窯跡	不明	なし	80	大草1号窯跡	12世紀	山茶碗
12	南山11号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	81	大草9号窯跡	12世紀	山茶碗
13	南山18号窯跡	11世紀	灰釉陶器	82	大草10号窯跡	11～12世紀	灰釉陶器・山茶碗
14	広久手5号窯跡	12世紀	山茶碗	83	大草16号窯跡	12世紀	山茶碗
15	南山19号窯跡	13世紀	山茶碗	84	南山25号窯跡	13世紀	山茶碗
16	南山4号窯跡	13世紀	山茶碗	85	南山30号窯跡	13世紀	山茶碗
17	南山3号窯跡	13世紀	山茶碗	86	広久手3号窯跡	13世紀	山茶碗
18	南山33号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	87	広久手4号窯跡	13世紀	山茶碗
19	南山13号窯跡	12世紀	山茶碗	88	広久手1号窯跡	12世紀	山茶碗
20	南山35号窯跡	13世紀	なし	89	広久手2号窯跡	12世紀	山茶碗
21	南山8・9号窯跡	11～14世紀	灰釉陶器・山茶碗・施釉陶器	90	広久手29号窯跡	13世紀	山茶碗
22	南山28号窯跡	12世紀	山茶碗	91	百代寺窯跡	11世紀	灰釉陶器・山茶碗
23	南山37号窯跡	13世紀	山茶碗	92	広久手22号窯跡	13世紀	山茶碗
24	南山39号窯跡	13世紀	山茶碗	93	海上B窯跡	13世紀	山茶碗
25	広久手21号窯跡	13世紀	山茶碗	94	海上北山窯跡	13・14世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
26	広久手17号窯跡			95	海上F窯跡	13世紀	山茶碗
27	広久手7号窯跡	13世紀	山茶碗	96	篠田窯跡	13～15世紀	13世紀
28	広久手12号窯跡	12世紀	山茶碗	97	海上E窯跡	13世紀	山茶碗
29	広久手18号窯跡	13世紀	山茶碗	98	塚原1号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器
30	広久手19号窯跡	13世紀	なし	99	塚原2号窯跡	13・15世紀	山茶碗・施釉陶器
31	**広久手第20・30号窯跡**	**10世紀**	**灰釉陶器**	100	山口八幡1号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器
32	広久手27号窯跡	13世紀	山茶碗	101	山口八幡2号窯跡	15世紀	施釉陶器
33	広久手26号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	102	山口八幡3号窯跡	15世紀	施釉陶器
34	広久手25号窯跡	13世紀	山茶碗	103	山口八幡社裏1・2号窯跡	15世紀	ヤマ茶碗・施釉陶器
35	広久手15号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	104	今林4号窯跡	12世紀	山茶碗
36	広久手24号窯跡			105	今林3号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
37	広久手28号窯跡	11～13世紀	灰釉陶器・山茶碗・施釉陶器	106	今林2号窯跡	12世紀	山茶碗
38	広久手D1 窯跡	15世紀	施釉陶器	107	今林1号窯跡	12世紀	山茶碗・施釉陶器
39	広久手D2 窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	108	釜ヶ洞2号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
40	**広久手F窯跡**	**11世紀**	**灰釉陶器**	109	釜ヶ洞1号窯跡	12・13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
41	広久手E窯跡	11世紀	灰釉陶器	110	緑1号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
42	広久手H号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	111	緑2号窯跡	13世紀	山茶碗
43	広久手23号窯跡	13世紀	山茶碗	112	平子窯跡	12・13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
44	**広久手C3窯跡**	**11世紀**	**灰釉陶器**	113	赤重窯跡	19世紀	磁器
45	広久手C1 窯跡	11世紀	灰釉陶器	114	井林2号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
46	広久手C4 窯跡	不明	山茶碗	115	井林1号窯跡	12世紀	山茶碗・施釉陶器
47	広久手C2 窯跡	13世紀	山茶碗	116	井林7号窯跡	13・15世紀	山茶碗・片口鉢
48	屋戸A窯跡	13世紀	山茶碗	117	井林8号窯跡	13・14世紀	山茶碗・片口鉢
49	広久手16号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢	118	井林6号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
50	広久手13・14号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢	119	井林3号窯跡	13世紀	山茶碗
51	広久手6号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢	120	井林5号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
52	宮地A窯跡	13世紀	山茶碗	121	長根7号窯跡	13世紀	山茶碗
53	長洞窯跡	11世紀	灰釉陶器	122	長根8号窯跡	13世紀	山茶碗
54	南山29号窯跡	13世紀	山茶碗	123	長根9号窯跡	13世紀	山茶碗
55	南山17号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	124	長根4号窯跡	13世紀	山茶碗
56	南山16号窯跡	13世紀	山茶碗	125	長根3号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
57	薬師山窯跡	17世紀	施釉陶器	126	長根1-2号窯跡	13世紀	山茶碗
58	南山43号窯跡	13世紀	山茶碗	127	長根1-1号窯跡	12世紀	山茶碗・施釉陶器
59	南山7号窯跡	12世紀	山茶碗	128	長根2号窯跡	13世紀	山茶碗・片口鉢
60	南山14号窯跡	13世紀	山茶碗	129	山口八幡6号窯跡	13世紀	山茶碗
61	南山5・6号窯跡	12世紀	山茶碗・施釉陶器	130	山口八幡5号窯跡	13世紀	山茶碗
62	南山42号窯跡	13世紀	山茶碗	131	宝ヶ丘A窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器
63	南山41号窯跡	13世紀	山茶碗	132	宝ヶ丘B窯跡	13世紀	山茶碗
64	南山32号窯跡	13世紀	山茶碗	133	塩草A窯跡	13世紀	山茶碗
65	南山40号窯跡	13世紀	山茶碗	134	若宮A窯跡	13世紀	山茶碗
66	南山1号窯跡	13世紀	山茶碗	135	西山路E窯跡	13・14世紀	山茶碗・施釉陶器・片口鉢
67	南山2号窯跡	12～13世紀	山茶碗・施釉陶器	136	清掃センター窯跡	13・14世紀	山茶碗
68	南山34号窯跡	13世紀	山茶碗	137	西山路D窯跡	13世紀	山茶碗
69	南山15号窯跡	13世紀	山茶碗・施釉陶器	138	西山路H窯跡	13・14世紀	山茶碗・施釉陶器

広久手 C3 号窯跡の調査

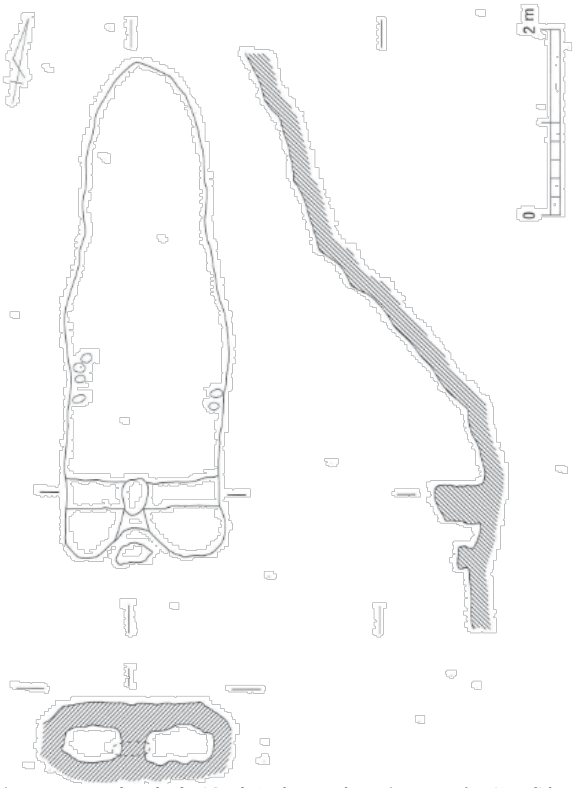
広久手 C3 窯跡をはじめ、平安時代の灰釉陶器を生産した窯や中世の山茶碗・古瀬戸を生産した窯は、一般的に「窖窯（あながま）」と呼ばれるものです。これは右図のように、丘陵斜面をトンネル状に掘りぬいた単純な構造の地下式、もしくは半地下式のもので、斜面下方から順に、燃料である薪を投入する「焚口（たきぐち）」、燃料を燃やす「燃焼室（ねんしょうしつ）」、製品を入れて焼く「焼成室（しょうせいしつ）」、煙突の役割を果たす「煙道部（えんどうぶ）」からなります。

本窯跡は昭和 32 年に発掘調査が行われ、この際、窯体である窖窯と灰原が確認されています。既に述べたように、正確な図面は残されていませんが、当時の記録によれば窯体と灰原が確認されました。窯体の天井や横壁は崩落していましたが、床面は比較的良好に遺存していたようで、燃焼室で発生した火炎を 2 つに分けるための分炎柱も残っていたようです。窯体の全長は約 6m、最大幅は 1.7m で、焼成室の最大傾斜は約 55 度とされています。



窖窯模式図

窯体全景



広久手 C3 窯跡窯体実測図（昭和 32 年作成）

遺物出土状況

（参考）広久手第 30 号窯跡

本窯跡は、市域南部の幡山区の南端、豊田市との市境に近い標高約 150 mの東向き小丘陵斜面に構築されています。平成 12 年に、愛知万博エントランスエリア整備に伴う発掘調査が行われ、窯体 1 基とそれに伴う灰原、丘陵上平坦面、土坑状遺構が検出されました。

現在保存されている窯体は半地下式の窖窯構造で、天井及び煙道部は流失していましたが、焚口から燃焼室・焼成室まで比較的良好に残存していました。残存長は中軸で 4.2m、最大幅は焼成室下方で 1.45 mで、床面傾斜は焼成室上方で 35°となります。なお、第 30 号窯跡の南側、小支谷を挟んだ東向き斜面には、広久手第 20 号窯が構築されていましたが、平成元年に調査が行われ、その後滅失してしまいました。

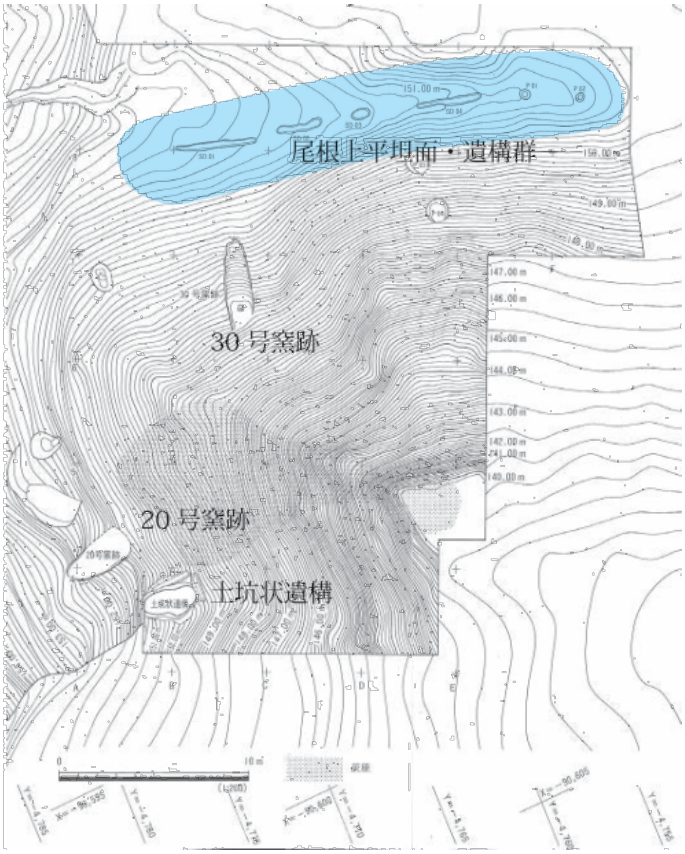
この他、尾根上にはおそらく人工的に造成された平坦面がみられ、そこでは柱穴（ピット）と溝が検出されました。この空間の時期や用途は明らかにされていませんが、平坦面上では使用痕が認められる灰釉陶器がまとまって出土していることから、窯体に伴う何らかの施設があったことが想定されます。

土坑状遺構は第 20 号窯から南へ 2 m付近の場所で確認されました。地山を削平して狭い平坦面を造成していましたが、用途は明らかにされていません。この他、失敗した製品や、窯から出た炭や焼土を投棄した灰原は、第 20 号窯跡が確認された東向き斜面を中心に広がっており、第 30 号窯跡のある南向き斜面では明確な広がりが確認されませんでした。したがって灰原のほとんどが第 20 号窯跡から排出されたもので、そうした様相から第 30 号窯跡の操業は比較的短命であったと推定されています。

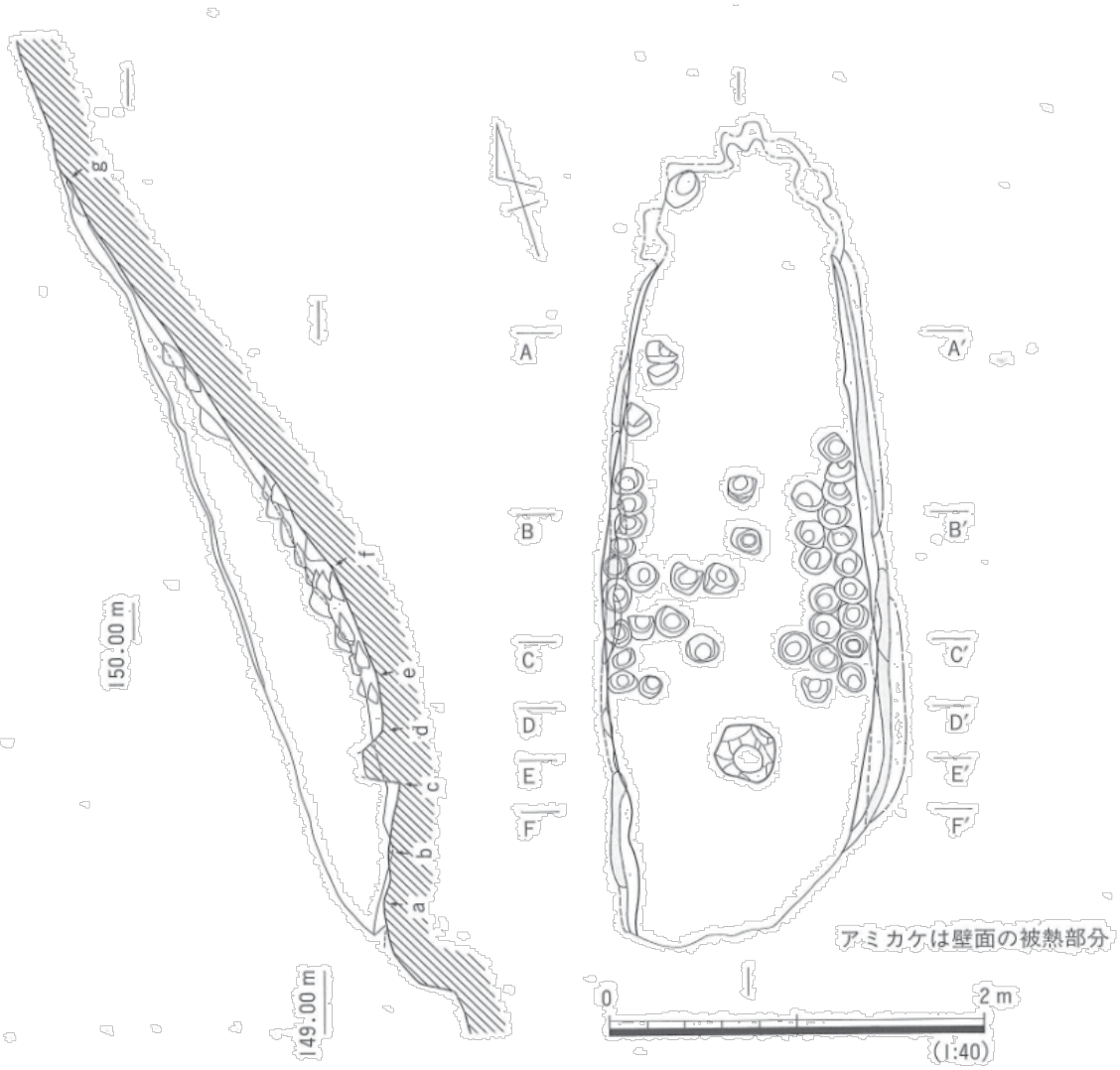
発掘調査で出土した遺物は、灰釉陶器碗・深碗（ふかわん）・皿・段皿（だんざら）・折縁皿（おりふちざら）・托（たく）といった碗皿類を中心に水注（すいちゅう）・平瓶（へいへい）・小瓶（しょうへい）・広口瓶（ひろくちへい）・短頸壺（たんけいこ）・甕などの壺・甕・瓶類や、片口鉢・小鉢などの鉢類がみられます。

本窯跡で生産された灰釉陶器の年代は、10 世紀中葉から後葉と考えられており、この年代は、現在瀬戸市域で生産されたやきものの中で最も古い段階にあたることから、本窯跡が瀬戸窯で最古の窯跡と位置付けられています。

広久手第 30 号窯跡全景



広久手第 30 号窯跡遺構配置図



広久手第 30 号窯跡窯体実測図

広久手第 30 号窯跡窯体全景

広久手第 30 号窯跡出土遺物

塔山城跡

塔山城は、堂山城とも相坂城ともいわれ、矢田川支流の吉田川が丘陵部から平地部へ移ろうとする部分の右岸に小高くそびえる丘陵部に立地します。

現在確認されている遺構としては、標高約 175m の丘陵頂部付近に主郭（本丸）と思われる南北 48m、東西最大 20m に広がる平坦面がみられ、さらに北西に派生した尾根の先端、標高 165 m 附近にも郭と考えられる平坦面がみられます。この北西の郭には室町時代を中心とした時代に製作されたと思われる五輪塔・宝篋印塔が 7 組以上まとめられた「おごりんさん」と呼ばれる聖地があり、毎年 4 月に吉野町の人々によって城主であったとされる森河下総守の供養祭礼が行われています。

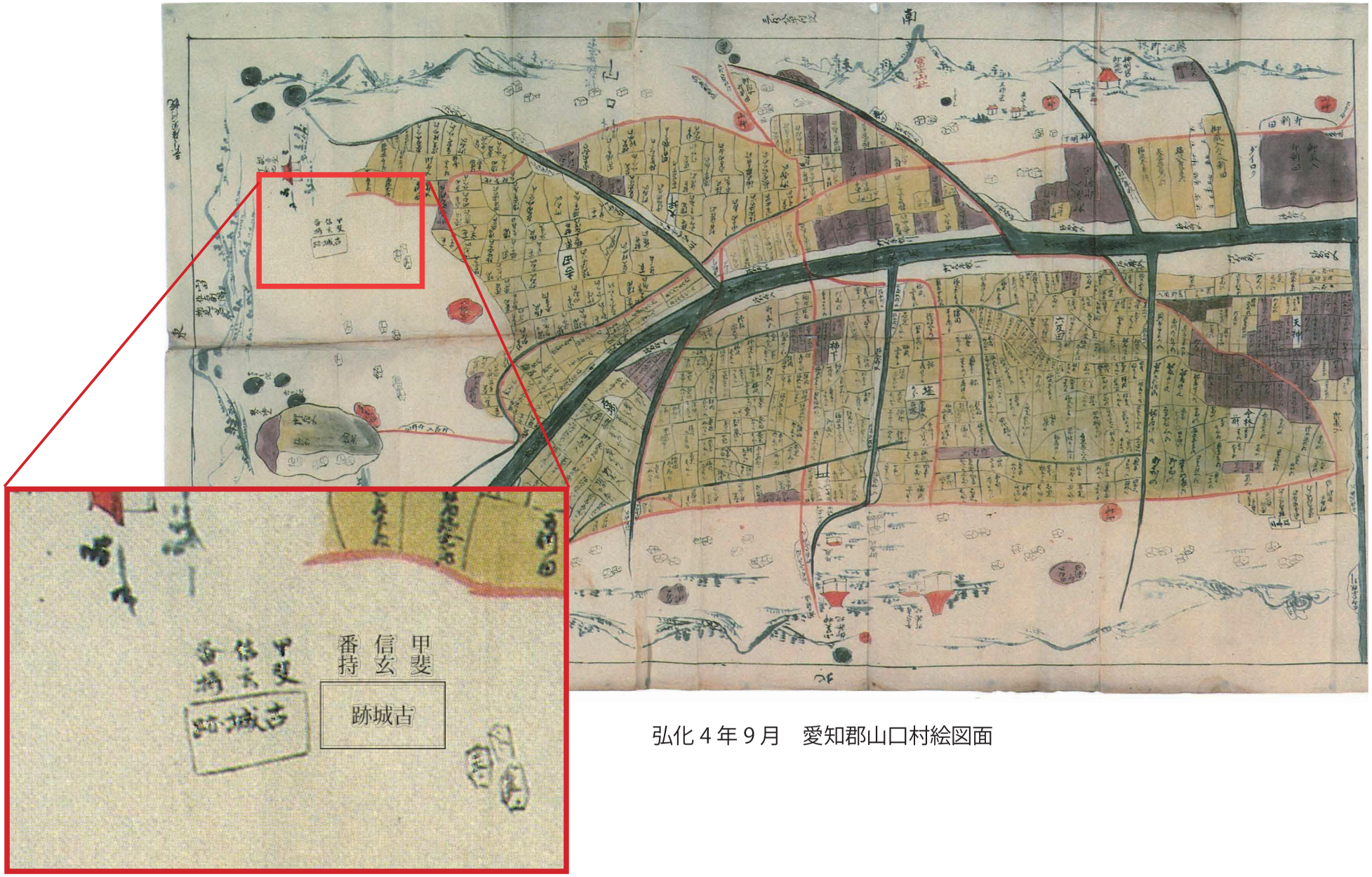
この他、主郭の西・南・東側は急峻な崖となり、北東から主郭への入口と思われる標高 160 mの地点には桝形状の虎口がみられます。そこからさらにもう一つの小規模な郭を介して主郭および北西取り付きの副郭に至ります。また、東側の郭との間には堀切と思われる長方形のくぼみが、さらに北東尾根筋にも堀切がみられます。ただし、後者の堀切は後世の道という説もあるようです。

城主に関しては、2 つの伝承が残されています。一つは『山口村古記』に「塔山城には森河下総守が居住し、後に大和国多武峯にうつる」との記述があるとされ（戸田 1966）、森河下総守は古代の天智天皇の代に山口郷の開発に注力したと伝えられています（大津 1982）。現在の若宮町 3 丁目に取水口をもつ森川用水にもその名が残されています。

もう一つの城主に関する伝承は、宝暦 2(1752) 年に成立した『張州府志』の山口城に関する記述中に「在山口村。土人曰。武田信玄置戍之地。今按。武田信玄取尾張地無所見。信玄嘗與織田信長有隙。進兵侵東濃。抜数城。恐是此時置斥侯之地也。」とあります。弘化 4(1847) 年に作られた愛知郡山口村絵図面の中で塔山城に相当する位置に「甲斐信玄番持 古城跡」の記載にもあるように、武田信玄が尾張へ侵攻するための前衛偵察基地であったとする伝承・考察がみられます。また、武田信玄の武将であった山田信濃守の伝承 (大津 1982) もあり、弘化 4 年の村絵図にも物見山の位置に「山田左右衛門物見ヶ岩」の記載があるように、地域では武田氏と関連する伝承が多くあります。しかし、武田信玄の西上作戦は元亀 2(1571) 年の三河・足助城や東濃・岩村城の攻略等がみられるものの、尾張での具体的な足跡は他にこの周辺では確認されていません。

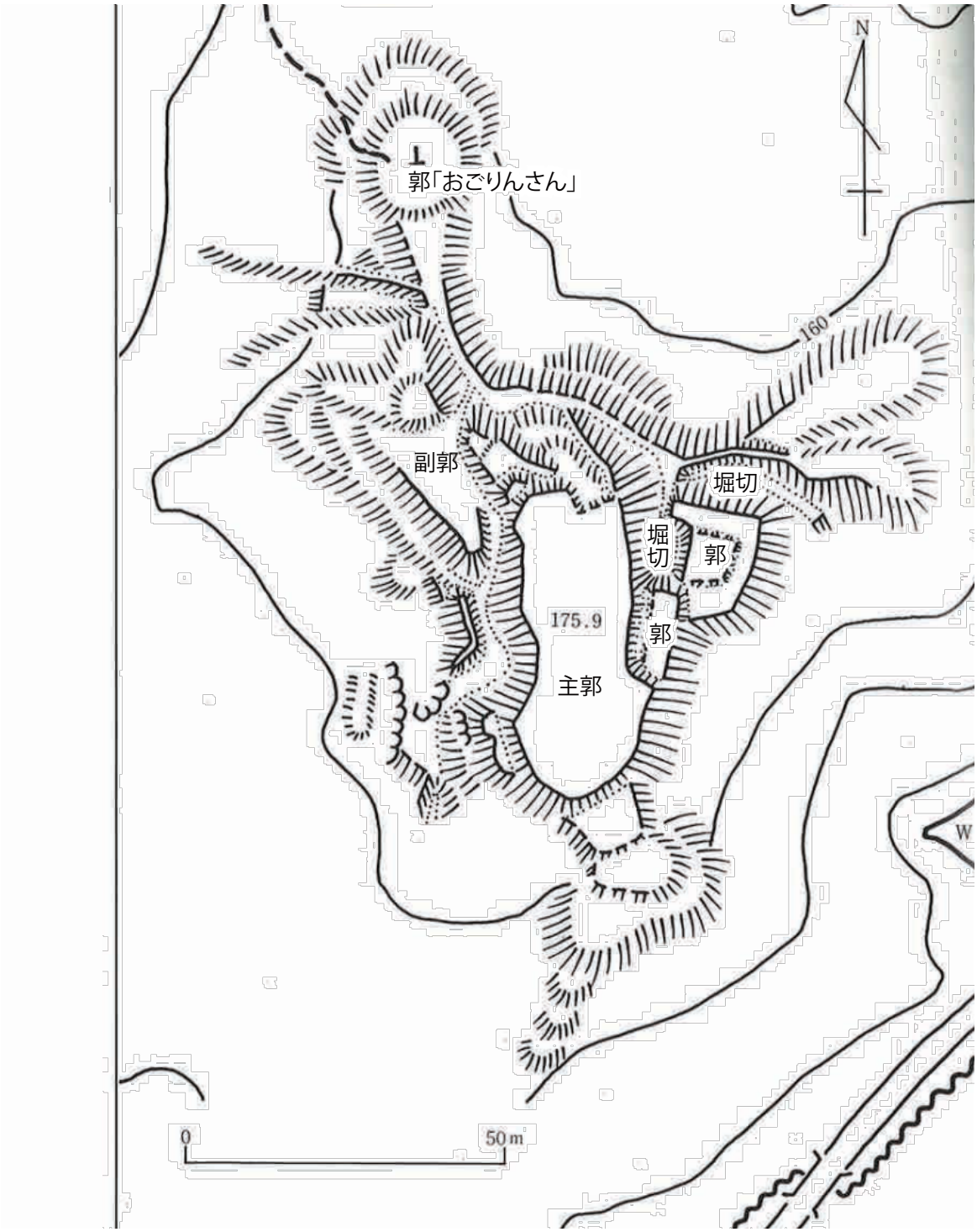
塔山城北東部の堀切跡

塔山城跡の「おごりんさん」



弘化４年９月　愛知郡山口村絵図面

【参考・引用文献】
大津文市 1982『江源の流れの中に (二)』
瀬戸市史編纂委員会 1985『瀬戸市史 資料編 1 村絵図』瀬戸市
戸田修二 1966「塔山城」『日本城郭全集 7』㈱人物往来社
福島克彦 1993「瀬戸の中世城館について」『研究紀要XI』瀬戸市歴史民俗資料館



塔山城跡縄張り図　福島 1993 より転載・加筆

海上の森南西部の自然

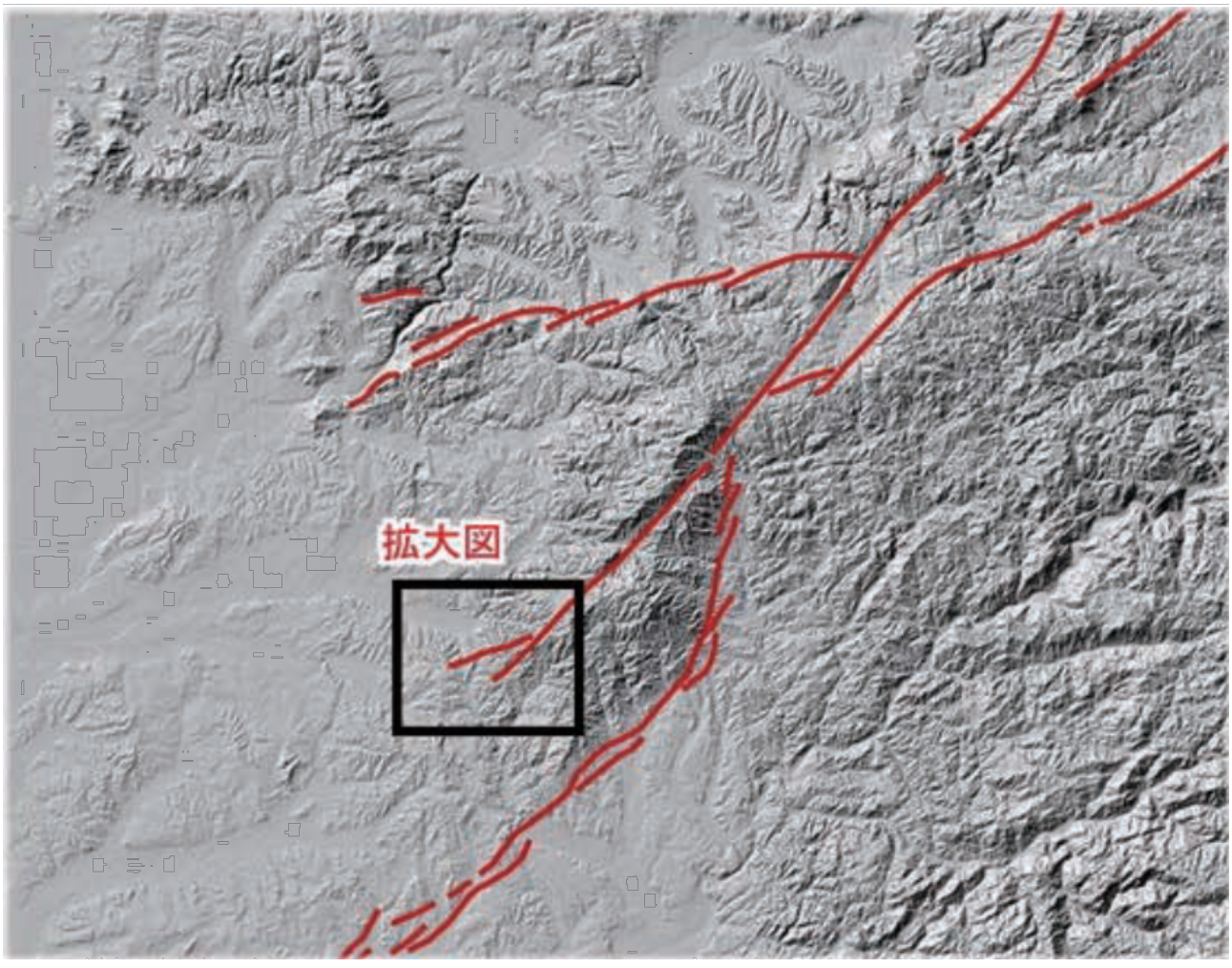
かいしょの森

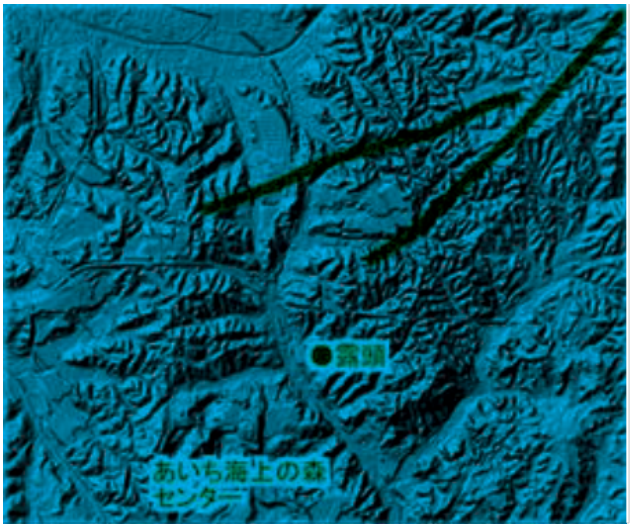
「海上の森」という名称はいまでは瀬戸市南東部地区の森林地帯を指すものとして定着していますが、2005 年日本国際博覧会の会場候補地になった 1990 年代には地図にありませんでした。一般市民が候補地の一部に含まれていた海上町の名からとって名付けたものが起源と考えられます。今回のせと歴の対象地は海上町ではなく、広久手町と吉野町東部です。

広久手町の「くて」は湿地を表します。それから分かるように広久手町には多数の湿地があり、東海地方の固有の生物が生息しています。当初は博覧会会場になる構想が立てられていましたが、自然環境が極めて貴重であることから早期に保全が決まり、いまでは愛知県の自然環境保全地域に指定されています。

猿投山北断層

海上の森は北東から南西にかけて大きな活断層が走っており、その南西端は広久手町と吉野町東部（以下、「この地域」という）のそのなかほどをほぼ東西に走っています。





幼児森林体験フィールドの西側に活断層の露頭が出ています。断層はほぼ垂直で、向かって左側（北側）は東海層群に属する砂礫層です。右側は花崗岩です。

断層の両側から強い力が加わった結果、南東側が上方へ押し出されています。

このような活断層の動きによって表層の地質は次の図のようになっています。

広久手町の南は花崗岩地帯で、その北側に東海層群の矢田川累層が広かっています。

その間は活断層によってはっきりと分けられています。

（「2005 年日本国際博覧会にかかる環境影響評価実施書」より抜粋）

花崗岩地帯の植生

花崗岩は地中深い場所でゆっくりとマグマが冷え固まったもので、鉄やマグネシウムなどさまざまな物質を含み、中性です。植物の成長に必要な微量元素も多く含まれていて、花崗岩が風化した場所ではコナラやツブラジイなどが大木に育っています。

ツブラジイの大木

ツブラジイは萌芽更新する性質を持ち、伐採されても残った株から複数のひこばえを出して復活します。薪炭林としての利用が長い海上の森ではツブラジイは単幹のものが少なく、多くは株立ちになっています。写真のツブラジイは 9 本の幹をもつ大株で、根回り 494cm は瀬戸市内で第三位です。

ツブラジイは常緑樹です。あいち海上の森センターの前はツブラジイの大木がこんもりとした丸い樹形を見せています。

ツブラジイの周囲にはアラカシ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキなどの常緑樹を見ることができます。

ヒイラギのまるい葉

ヒイラギの葉には通常、鋭い鋸歯があり、それはシカなど草食動物による食害から逃れるための仕組みと考えられています。海上の森センター前ではそのヒイラギがありますが、葉に鋸歯が見られません。草食動物の口が届かないほどまで大きく育つと、鋸歯がなくても食害に遭わないため、その生成を省略するものと考えられます

砂礫層地帯の植生

猿投北断層の北側は砂礫層に覆われています。砂礫層の大部分は丸い小石と砂です。小石はほとんどがチャートで、古代の海底で死んだ放散虫の骨格が堆積したものです。もともと二酸化ケイ素しか含まれていないだけでなく、固いためなかなか風化が進みません。チャートばかりの場所で植物が育つために必要な土壌の形成が遅れます。砂は風化花崗岩を起源とする珪砂が大半を占め、二酸化ケイ素です。川や湖に流れ込んだ砂は、流水によって微量

元素を洗い流されています。そのような砂と小石だけの地域では植物の成長は制限されます。
　そのため大木が少なく、林床は日当たりがよいため、砂礫層が覆う五輪塔周辺ではコシダなどがよく茂っています。

塔山城の五輪塔周辺の砂礫

周辺の疎林

湿地

この地域には多数の湿地が成立しています。昨年 11 月の馬ヶ城視察でも見られたように、この地域の湿地にはシデコブシを筆頭に、トウカイコモウセンゴケ、クロミノニシゴリ、ヘビノボラズなど分布に特色がある植物が多く、「東海丘陵要素植物群」と呼ばれています。
またモウセンゴケやミミカキグサのように、不足する栄養を補うために昆虫やプランクトンを捉える能力をそなえた食虫植物も生育しています。シダでも湿地にしか生育しない種が見られ、特異な景観を呈しています。さらに昆虫ではヒメタイコウチやハッチョウトンボなど湿地のみに見られる生き物がいます。

モウセンゴケ（2020/1/26 撮影）

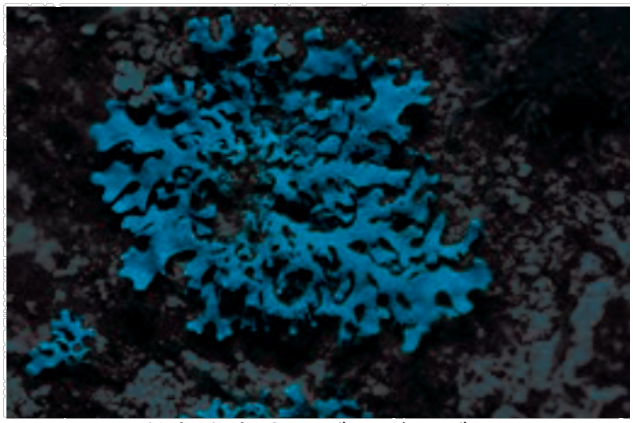
ミズスギ（2020/1/26 撮影）

ハナゴケとトゲシバリ

あまり知られていませんが、地衣類はキノコの中に藻類が共生しているものです。地衣類にも湿地特有の種がいます。写真は白っぽいものがハナゴケ、緑色のものがトゲシバリといい、湿地周辺でよく目にすることができる地衣類です。

この地域の地衣類には蛍光物質を生成し、紫外線によって黄色く発光するゴンゲンゴケもあります。

ゴンゲンゴケ

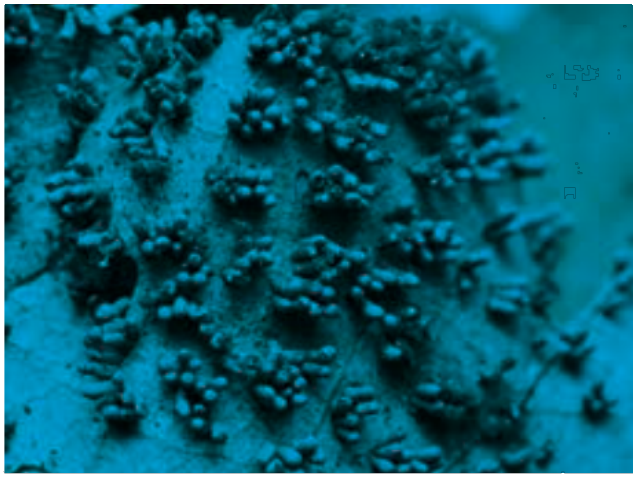


蛍光発光するゴンゲンゴケ

ギフチョウの保護目的の管理

屋戸川・寺山川の流域はもとより貧栄養で樹木が成長しにくい環境でした。江戸時代には樹木が窯業の原料として伐採されつくした後、下流に水害が多発したため江戸時代から明治そして昭和年代に多数の堰堤が築かれました。その結果、土砂の移動が起こりにくくなり、栄養が蓄積されて土壌の形成と森林の発達が進みました。平成年代になるとシデコブシ、アカマツ、モチツツジのような日当たりを好む樹木は急激に数を減らしました。コナラ、アベマキ、アラカシなどは風媒花であり、ギフチョウなど蜜源に頼る生活をする昆虫は好みません。そこで愛知県は専門家の指導を受けながら高木を除去するなど、日当たりのよい、かつての景観を回復する取り組みを始めています。

変形菌の大発生



変形菌はふだん変形体という形の定まらない姿で倒木の中や落葉の上などを這い、夏から秋にかけて子実体といわれる器官を形成して胞子を散布します。子実体が微小なキノコの形をしていることから菌という字があてられているもののキノコの仲間ではなく、アメーバの仲間であり、活発に移動しながら摂食します。変形体には多数の核が含まれているものの、細胞としてはひとつです。

海上の森南部を中心に昨年夏、その変形菌の一種が大発生しました。海上の森の変形菌相を調査していた筆者がその現象に遭遇し、500 か所で子実体を確認しました。確認された変形菌はツツスワリホコリという種で、これまでもかなり広い範囲に多数の子実体を形成することが知られていましたが、具体的な位置、標本などのデータが得られたのは今回が初めてと思われます。

海上の森センターから屋戸川、寺山川の流域を超えて四つ沢までの砂礫層地帯、約 57 ヘクタールに高い密度で発生していました。変形菌はひとつの個体がスクロールしながら数メートルの範囲に広がることが知られていますが、今回は東西南北数百メートルにわたって発生が確認され、ひとつの個体がかなり広い範囲を占めていた可能性があります。同様の例ではひとつの個体が長い時間をかけて 15 ヘクタールもの面積にひろがったナラタケの事例もあり、注目すべきものと考えます。

今後のスケジュール

＜10月＞

せと歴！　小長曽・瓶子窯跡をめぐる

日　時：10月3日（土）　午前9時30分～11時30分・午後1時～3時
集合・解散場所：瀬戸市文化センター北駐車場
内　容：『瀬戸窯跡』として国の史跡に指定されている「小長曽陶器窯跡」と「瓶子陶器窯跡」は、室町・江戸時代の赤津地区の窯業生産の一端を明らかにする貴重な窯業遺跡です。この2つの窯跡を午前・午後の2回に分けて解説付きで見学します。
参加費：無料
★定員各部13名に達し次第受付を終了します。

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～１０００年以上の歴史を誇るせともののまち 陶都瀬戸～」を開設しました。
これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：http://seto-guide.jp/

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団